

# 撰取不捨

## — 阿弥陀さまの御手に抱かれて —

前号から、浄土真宗のみ教えを伝えるためのキーワード、「南無阿弥陀仏(名号本尊)」「撰取不捨」「他力本願」について本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に解説していただいています。今号は「撰取不捨」です。

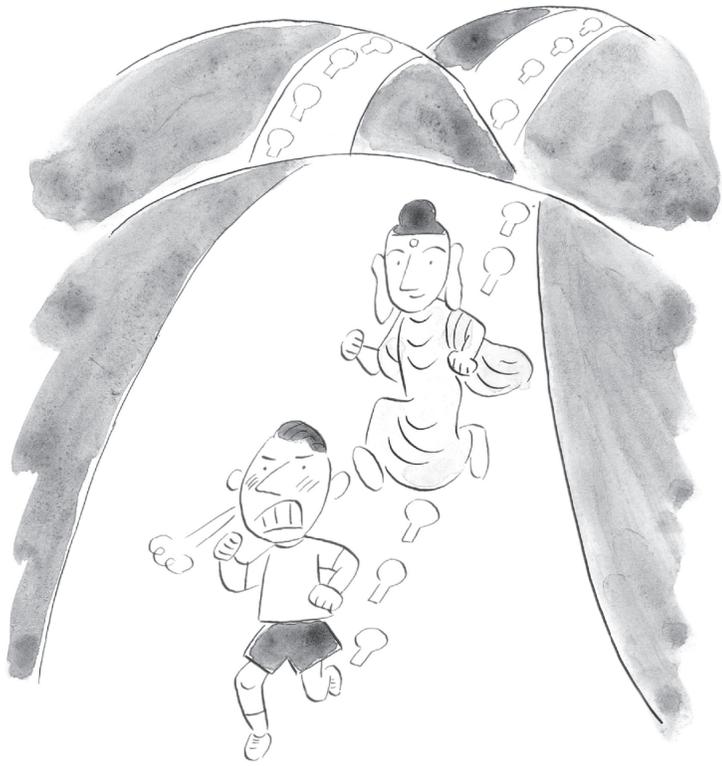
### 「撰取不捨」阿弥陀さまだけが持つ特別な徳

阿弥陀仏には、さまざまの徳があります。他の仏方と等しい徳もあれば、阿弥陀仏だけの特別な徳もあります。この阿弥陀仏だけの特別な徳が、「撰取不捨」です。

なぜ「阿弥陀仏」というお名前なのかについては、『阿弥陀経』の「名義段」という一節で示されています。「名義段」とは、お名前のいわれを説かれた一段という意味です。

かの仏の光明無量にして、十方の國を照らすに障礙するところなし。このゆゑに言して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の壽命およびその人民の壽命も無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく(註釈版聖典卷二)その仏の光明には限りがなく、すべての國々を照らして何ものにもさまたげられることがない。それで阿弥陀と申しあげるのである。また舍利弗よ、その仏の壽命とその國の人々の壽命ともに限りがなく、実にばかり知れないほど長い。それで阿弥陀と申しあげるのである。

と示されます。「光明無量(光)に限りがない」「壽命無量(いのち)に限りがない」であるから「阿弥陀」と名づける、お釈迦さまが説明へたとされています。親鸞聖人はこの「名義段」の部分を、『阿



え/ひじ みえ

## み教えの言葉を学ぶ②

筆者 満井 秀城



本願寺派総合研究所副所長。司教。

「撰取不捨」をたたる和讃において、十方微塵世界の念仏の衆生をみそなはし、撰取してすてざれば、阿弥陀となつたてまつる(同切)数限りないすべての世界の念仏するものを見通され、撰取して決してお捨てにならないので、阿弥陀と申しあげ(と)とほめたたえられています。『阿弥陀経』の和讃として、「阿弥陀となつたてまつる」とのお示しですから、先の「名義段」のおこころを詠まれたことは明白です。

ここで注意したいのは、『阿弥陀経』の中で阿弥陀と名づける理由については、「光明無量」「壽命無量」だからでした。それなら「光寿無量のゆえなれば、阿弥陀となつたてまつる」と詠まれてもよまざるどころです。しかし、これを敢えて「撰取してすてざれば」と、「撰取不捨」の徳でたえられているのは、「撰取不捨」こそは阿弥陀さまならではの特別な徳だからです。「光寿無量(空間と時間に限りがない)」「の徳は、実は阿弥陀仏だけなく、他の仏方の中にもこの徳を持つ仏はおられます。阿弥陀仏の阿弥陀仏たる所以は、「撰取不捨」にある(と)ことです。

### 背を向けて逃げ続けても 追いかけて続けてくださる

この「撰取不捨」の徳について、先ほどの和讃には「左訓」といって、語句の左側に小さな文字で、意味や訓みなどを書き記されている部分があり、そこでは重要な意義を、大きくこつぽと示しておられます。

「つは、もの逃ぐるを追はへん」と(同切、脚註)とあります。阿弥陀さまとつは、逃ぐる者を追いかけて続けてくださる仏さま(と)ことです。他の仏方、あるいは神さまにしてもすべて、自分の方を向いた時だけ救ってくださるに過ぎません。神社に参拝した時の作法では、鈴を鳴らし拍手を打ちます。これは、「私、来まして」「あなたさまの方を向いてます」という意思表示です。この意思表示がないと、神さまは私たちの方を向いてくれないのです。

いた時だけ救ってあげましょう」という仏さまではありません。自分の都合に合わせて仏さまを利用しようという、不実な土儀には上げられません。私たちがどこを向いていても、たとえ背を向けて逃げ続けていたとしても、追いかけて続けてくださる仏さまなのです。ちょうど、お風呂からあがった子どもが、ふざけて裸のまま逃げ回っているのを、お母さんが追いかけて、ついにはバスタオルでくるんでくれるのと同じです。蓮如上人は、南無阿弥陀仏に身をまもる(たもた)ること(なり) (同1263) 南無阿弥陀仏にその身を包まれているのである(と)と仰っています。

### 必ず仏に 成らせていただく

2つめには、「ひとたびとりて永く捨てぬなり(同切、脚註)ともお示しなされています。

「お念仏」で、どうしてごんごりをひらくことができる。少し、むしがよすぎないか」と疑問に思うとしたら、その答えが「撰取不捨」です。ひとたび仏さまの御手に抱かれた者は、必ず仏に成らせていただくのです。愛しい人との死別は悲しくつらいものです。しかし、先立たれた愛しい方は、まさにこのことを身をもってお示しくたまり、み仏に抱かれて、お浄土に生まれられたのです。そして遭された私たちが、「南無阿弥陀仏」とお念仏申す身にならせていただきたいことは、すでに阿弥陀さまの御手に抱かれた証です。だから、ともに浄土で会えるのです。

私が住職を務めるお寺の前総代長さんが以前、奥さまについてこんな相談を持ちかけてくれました。その奥さまは、法義に篤い人で、よく聴聞を重ねてくれていました。ところが、「アルツハイマー性認知症」にかかり、今や、お仏壇にお参りすることを忘れてしまっています。どうしてあげたらいいでしょう」というものでした。私からはこんなふうに申しあげた記憶があります。「私たちは、いつ、どんな状態で、阿弥陀さまのことを忘れてしまつかわかりません。しかし阿弥陀さまの方は、ずっと、私たちのことを決して忘れません。撰取不捨の仏さまですから、だから、あなたさまが手を取って、報恩の思いでお仏壇に一緒にお参りしてみてください」と申し上げたいです。

「撰取不捨」は、文字数でたった四文字ですが、その中には大きく深い、阿弥陀さまならではの特別なお徳が表されています。大切に味わっていただきたい言葉です。